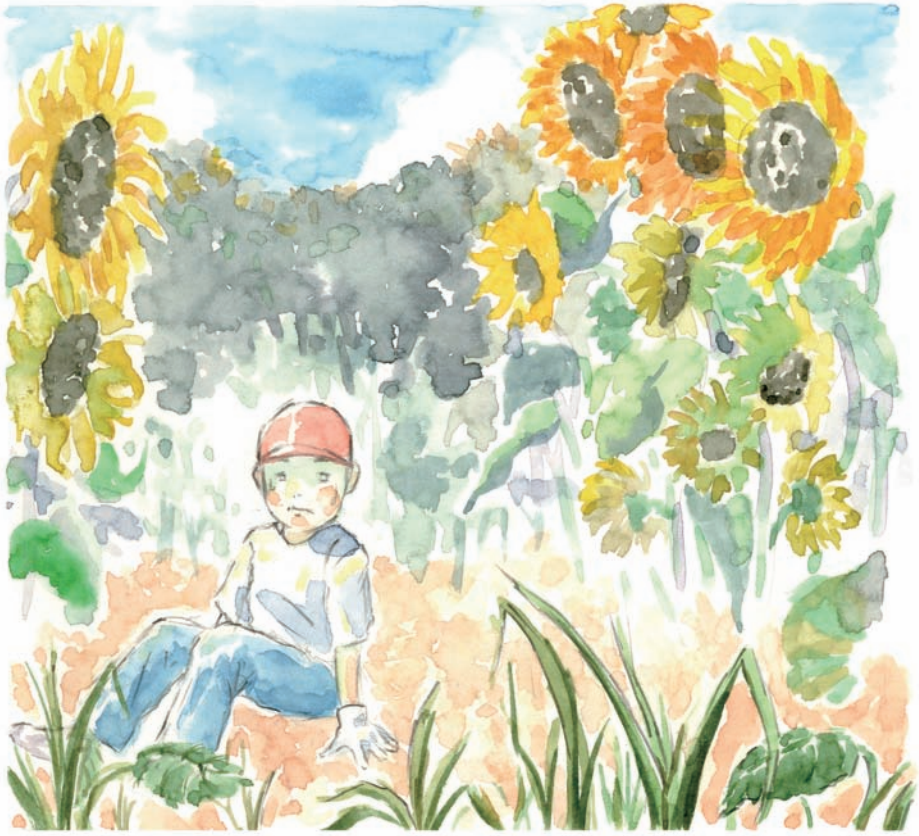
二十五万本のひまわり畑

那珂市のひまわり畑
市が地域の農家に協力を依頼し、複数の農家が参加して栽培しているひまわり畑。開花期には約二十五万本のひまわりが咲き誇る。

ひまわりフェスティバル
那珂市のひまわり畑を中心に、毎年八月下旬頃に開催されるイベント。ステージイベントや露店、花火大会などでにぎわう。

「すごい、やっぱり広いな。」

それが実際のひまわり畑を前にしたぼくの感想だった。僕たちは総合的な学習の時間の取組で、職場体験学習を進めている。グループのテーマは「働くことについて考える」というものだった。体験する職業として選んだのは農家の仕事。今の僕たちの感覚では、ある意味一番遠いところにある職業だからだ。農業に取り組む人の思いを知ることで、「働く」ということの意味に近づけるかもしれないと考えたのである。そういうわけでぼくを含めた三人のメンバーは、総合公園近くの広大なひまわり畑に来ていた。総合公園の周りに広がるひまわり畑は、地域の農家の協力を得ながら栽培している。八月の末に開催される那珂市の夏のイベント、「ひまわりフェスティバル」の舞台となるひまわり畑である。今日は、その協力農家の一軒である鈴木さんの畑で、職場体験を行うことになったのだ。実際の農業を体験するのが初めての僕たちにとって、目の前に広がる広大なひまわり



二十アール

二千平方メートル。一アールは一辺が十メートルの正方形の面積で百平方メートルある。

畑は、完全に未知の世界だった。

「畑は全部で二十アールあります。今日は、できる限りそこの雑草取りをお願いします。やり方としては、まず、一人一本の列を担当して…。」

作業方法を説明する鈴木さんの話を半分以上うわの空で聞きながら、心の中は期待と不安で一杯だった。

除草作業が始まった。作業開始後しばらくは、それでもなんとか自分の分担だけはやり遂げようという責任感もあり、作業を進めた。しかし、徐々にペースは落ち、その成果にも荒さが目立つようになってきた。振りかえって見ても、自分の足下に向かうにつれ、明らかに雑草の取り残しが目立っていた。僕は地面に座り込み、大きなため息をついた。一筋の汗があごの先から地面に落ちる。

「ここまでしないとダメなのかな…。」

つい、そんな言葉が口をついて出てしまう。わかってはいる。ひまわりにとって、雑草がない方が成長によいことは。小学校の理科の授業でも学習していたし。

でも、そんなことじゃなくて、今僕の心に浮かんでしまうのは、この作業の別の部分の意味だ。うまくは言えないけど…。

「休けいの時間だよ。」

その時、鈴木さんの声がした。僕は、ふっと大きな息を吐き出し、立ち並ぶひまわりの上に顔を出した。その時、鈴木さんの姿が意外にも、かなり遠い所にあるのを見てびっくりした。

「同時にはじめたのに、鈴木さんはあんなに遠くまで進んだのだろうか。」

僕は思わず左右を見渡した。すると、それほど離れていない場所に立っている友達と、目が合った。ぱっと見開いたその目の中に、僕と同じ驚きと戸惑いが浮かんでい

た。改めて目の前に広がるひまわり畑を見渡す。何となく、今日の最初に見たときよりも、畑はさらに広く見えた。休けい中、僕は思い切って鈴木さんに質問をぶつけた。

「なぜ、ひまわり畑づくりに協力する気になったのですか。」

鈴木さんは少し困ったような顔をして、一度僕の顔を見た。そして、目を伏せると、右手と左手をしっかりと胸の前で組みながらじっと考え出した。やがて、組んだ指を開き、手のひらを見つめながら、ゆっくりと、かみしめるように語った。

「誰かの役に立ちたい、からかな。」

そう言うと、鈴木さんは照れたようににっこりと微笑み、僕たち三人の顔を順番に見つめた。

その答えは、僕たちにとってなかば予想していた答えではあった。しかし、納得できる答えとはいかなかった。僕たちは何となくお互いの顔を見渡し、釈然(しゃくぜん)としない思いを抱えて黙りこんだ。

すると、そんな僕たちの思いを知ってか知らずか、鈴木さんは、一瞬ひまわり畑に目を向けた後、僕たち三人に向き直り、笑顔のままで話し始めた。

「少なくとも、今はお金のためではないよ。かといって誰かに認めてもらいたいからでもないです。私は数十年来、農業一筋で生きてきた人間です。自分にできるのは、土とかかわっていくことです。目の前に、自分にできる畑仕事があるなら、取り組まない自分より、取り組む自分でいたいと思います。それが、誰かのためになるなら、なおのことありがたいですね。私にとって、働くとはそういうことです。」

そう言った鈴木さんの言葉は力強く、笑顔は、とても誇らしげに見えた。何かとてつもなく大きな仕事を成し遂げてきた人のように見えた。僕は、鈴木さんの言った言葉の全てを理解できたわけではないし、すっきりと納得した訳

ではないけど、少なくても何を納得すればよいのかは、わかったような気がした。

「よしっ、やるか。」

鈴木さんは、僕たちの顔を見渡しながら大きな声で言った。僕たちは、声をそろえて、

「はいっ」と返事をした。

三人は、目の前に広がるひまわり畑に向かって走り出す。僕は、ひまわりのうねの手前で一度立ち止まると振り返った。そして、大きくぺこりとお辞儀をすると、鈴木さんに向かって手を振った。

鈴木さんは、にっこり笑って手を振り返してくれた。

ひまわり畑の様子

ひまわりフェスティバル

「なかひまわりフェスティバル」は、静峰ふるさと公園で行われる「八重桜まつり」と並び、那珂市の代表的なまつりの一つとなっている。

約四ヘクタールの畑には二十五万本のひまわりが咲き誇り、見晴台からの眺めは圧倒的な美しさである。メイン会場となる那珂総合公園では、様々なステージイベントや露店、花火大会などが行われ、多くの観客が訪れる。